

国際光年シンポジウム

国際光年と日本

山岡 均 (九州大学/IAU アウトリーチ日本窓口)

1. 事の発端

「国際光年」は、世界的には International Year of Light and Light-Based Technologies (IYL) と呼ばれる「国際年」のひとつだ。国際年とは、国際連合総会において採択・決議されるもので、特定の事項に対して、特に重点的な問題解決を国連はじめ全世界の団体・個人に呼びかけるための期間とされる。毎年、何らかの国際年が宣言されており、私たちの身近なところでは、2005年の世界物理年 (World Year of Physics)、2009年の世界天文年 (International Year of Astronomy) が記憶に新しい。World と International との差異は不詳だが、後者が多いようだ。ちなみに 2016 年は「国際豆年」(International Year of Pulses) とのことである。

2013年12月に開催された国連総会において、2015年を IYL とすることが決議された [1]。それ以前の動きはつまびらかでないが、IYL の国際 Web サイトの Fact sheet [2] によると、2012年10月に UNESCO 執行部で認められ、2013年11月に国連に提案されたとの経緯らしい。

2015年は、光に関する業績がいくつも周年を迎える年である。国連決議にも紹介されているように、

1015年：イブン・アル・ハイサムの光学研究

1815年：フレネルの波動説

1865年：マクスウェルの電磁波の定式化1905年：アインシュタインの光電効果理論1915年：アインシュタインの一般相対論

1965年：ペンジャスとウィルソンによる

宇宙背景放射の発見

1965年：光ファイバーに関するカオの業績

などが代表的なものである。これらの多くは、物理学、特に天体物理学に大いに関係が深いものであったことが見て取れる。

しかしながら、IYL の国連での決定に際し、私たち天文のコミュニティは蚊帳の外であったように見受けられる。正確な時期や経緯については、今回のシンポジウムの Cheung さんや縣さんの講演・集録に譲るが、IYL 国際委員会から国際天文学連合 IAU に協力依頼が来たのは 2014年3月ころで、IYL の開始まで半年ちょっとのことであった。

2. IYL に対する世界全体の取り組み

IYL に対する天文界や日本での対応については次章以降に述べることとし、まずは世界全体の取り組みについてまとめておくことにしよう。

IYL の設立者には、American Institute of Physics (AIP) や the European Physical Society (EPS) など 12 の学協会が名を連ねており、事務局はイタリア・トリエステの Abdus Salam International Centre for Theoretical Physics (ICTP) に置かれている。スポンサーや協賛には、学協会や大学などに加え、光技術に関係する企業も数多く参画している。

全体イベントとして、開会セレモニーが 2015年1月19~20日にフランス・パリで開催された。IYL 国際 Web サイトでは、数多くの関連イベントが登録され、世界中の取り組みが紹介されている [3]。閉会セレモニーは、2016年2月4~6日にメキシコ・メリダで行われた。

3. 日本での対応：2014年

IAU でこの種の取り組みに対処するのは、アウトリーチ室（Office for Astronomy Outreach）の仕事となる。このアウトリーチ室は日本の国立天文台に置かれており、IYL への対応には、日本における IYL への取り組みとの協調と調整が不可欠であった。

まず確認しなければならないのは、IYL を日本語でどう呼ぶか、ということであった。前述の国連決議[1]は、英語のほかにもアラビア語、中国語、フランス語、ロシア語、スペイン語で準備されていたが、それ以外の言語でどのように呼称するかは、各国で決める必要がある。

2014年7月、筆者がアウトリーチ室の縣さんに最初に相談を受けた時点では、IYL に対する日本語の確定した名称があるのかどうかすら不明確であった。「国際光年」という呼称が存在するとの情報があったが、これに対し天文のコミュニティでは、2国間を想起させる「国際」よりも多国の取り組みであることを表わす「世界」のほうがいい、また「光年」は長さの単位とまぎらわしい、などの議論があった。「国際光年」が確定的なものなのか、違う日本語名を取ることができるのか、を確認することが焦眉であった。

ちょうどこの時期に IYL 国際 Web サイトが立ち上がったため、そこに記された日本のコンタクトパーソンへ問い合わせるなどしたが、先方が多忙でなかなか連絡がつかないままになった。

そんな折、8月後半になって、IYL の国際委員長である John Dudley さんから IAU アウトリーチ室に、IYL の各国語ロゴが送られてきた。その日本語版には、IYL の日本語名称として「光と光技術の国際年」と書かれており、聞き及んでいた「国際光年」とは異なる日本語名称が出現したことになる（図 1）。さまざまな Web サイトを検索してみたところ、



光と光技術の
国際年
2015

図 1 送られてきた日本語ロゴ

る、この名称をはじめ、「光および光技術の国際年」「光とその技術の国際年」「光の国際年」など、さまざまな日本語名称が混在することがわかった。この状況は、混乱を招くたいへん憂慮すべきもので、一刻も早く収拾する必要がある。

あわててこのロゴを作製した人に接触し、議論した結果、このロゴは IYL 日本委員会とは無関係に制作されたもので、日本語名称にはコンセンサスがないことが確認された。さらに、日本のコンタクトパーソンとようやく電話が繋がり、やはり議論した結果、

- ・「国際光年」という名称は、IYL の日本の受け入れ先である、日本学術会議総合工学会委員会 ICO 分科会で決めたもの
- ・ICO 分科会で日本委員会をこれから立ち上げるが、天文のコミュニティ（IAU）は日本委員会の傘下ではないので、必ずしも分科会での決定に従わなくても良いとの結論を得た。

日本委員会は今後「国際光年」と使うということなので、天文のコミュニティが別の名称を使用するのは、原理的には可能と言え、やはり混乱のもとだろう。そこでこの後は、天文のコミュニティでも「国際光年」という名称を使い、ただし可能ならば「光」に「ひかり」とルビをふろう、ということで決着となった。

4. 日本での対応：2015年

IYL日本委員会は「国際光年協議会」の名で2015年1月に設立された[4]。4月21日には記念シンポジウム(特別講演:天野浩さん)、12月11日には総括シンポジウム(特別記念講演:赤崎勇さん)を、いずれも東京大学安田講堂で開催した。LED開発で2014年度ノーベル物理学賞を受賞した方々をはじめとする講演に、多くの参加者が集まった。

日本天文学会には、国際光年協議会から、協議会会員および推進パートナーとしての参画要請があった。理事会で議論し、参画することでまとまったのだが、申し込みに対して協議会から返事が来ず、実質的な参画は行われなかった。

日本天文協議会[5]では、2014年9月の総会で、国際光年にどのように参画するかの議論がなされた。その結果、日本の天文界全体としてのイベント実施は難しく、個別にイベントを開催し、イベント登録サイト[3][6]に各自登録していく形で参画することになった。振り返って日本の登録サイトを調べてみると、天文関係の登録イベントは、講演会や月食観察会、プラネタリウム番組などたいへん多岐にわたり、全体のほぼ半数を占めていた。この数字は他の分野を圧倒しており、結果的にこの方式は成功であったといえよう。

もちろん天文分野では、OAOを中心とした活動が数多くまた密度濃く実施された。これについてはCheungさんほかの報告に譲る。

5. おわりに

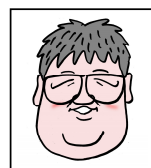
国際光年は、天文コミュニティが主体となって進めた世界天文年とは異なり、別の分野が主体であるところに参画する形だったため、いろいろと勝手に違った、という側面が色濃く残った。特に、コンタクトパーソンとのやり取りが困難だったこと、方針や決定事項が明確に公開されていなかったことが、取り組

みを難しくしたという感は否めない。

個別のイベント登録という点では、日本の天文界の取り組みは他分野を圧倒していた。これは、世界天文年をはじめとするこれまでの経験に裏打ちされたものであると言えよう。日本天文協議会や日本天文学会などで、これらの個別イベントを支援する方策を考え実現することが、これからの同様の取り組みへの参画を容易かつ円滑にする点で必要になっていると考える。このことについて、午後のパネルディスカッションをはじめとしてさまざまな場面で議論していきたい。

文献

- [1] http://www.light2015.org/dam/About/Resources/Resolution/Resolution_EN.pdf
- [2] http://www.light2015.org/dam/About/Resources/IYL_IYL2015_Fact_Sheet/IYL2015_Fact_Sheet.pdf
- [3] <http://www.light2015.org/Home/Event-Programme.html>
- [4] <http://iyl2015-japan.org/societies>
- [5] 国立天文台、日本天文学会や日本天文愛好者連絡会など天文団体が連携する組織。
<http://www.astronomy2009.jp/fswiki/wiki.cgi/astroconf?page=FrontPage>
- [6] <http://iyl2015-japan.org/event/internal>



山岡 均